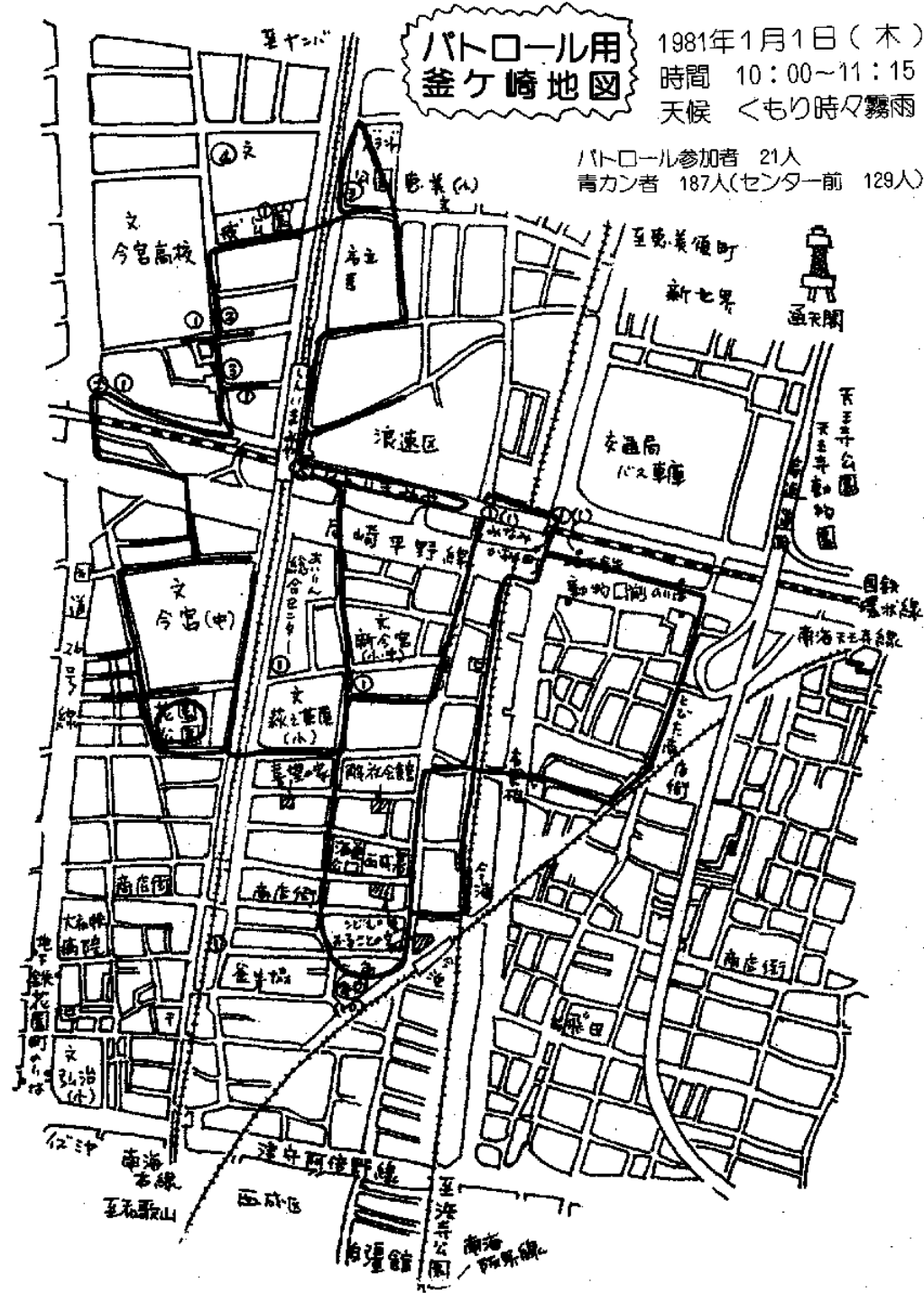


釜ヶ崎

1980年冬



パトロール用
釜ヶ崎地図

1981年1月1日(木)
時間 10:00~11:15
天候 くもり時々霧雨

パトロール参加者 21人
青カン者 187人(センター前 129人)

- 第11回釜ヶ崎越冬闘争支援報告書
「釜ヶ崎 1980年冬」
- 発行日 1981年 7月15日
- 発行所 大阪市西成区萩ノ茶屋2-8-18
喜望の家気付 ☎ 06-647-3946
- 編集 キリスト教釜ヶ崎越冬委員会
「釜ヶ崎1980年冬」編集委員会
- 印刷 関西プリントセンター
- 頒価 300円

キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

B 200



釜ヶ崎 1980冬 もくじ

第11回釜ヶ崎越冬闘争支援を終えて……	2
越冬日録 1980, 11~1981, 2……	5
今年の越冬の特徴……	10
初めて越冬に参加して……	15
炊き出し統計グラフ……	18
青カン統計グラフ……	19
越冬闘争よびかけピラ……	20
第5回越冬セミナー報告……	22
釜ヶ崎結核患者百人のアンケート調査……	25
入佐さんの活動日記……	41
患者交流会……	42
新しい労働者の家……	44
総括集会……	45
新聞から——殺された結核患者——……	54
越冬委員会専従として……	57
編集後記……	58

写真 中川繁夫
カット 武内司郎

「釜ヶ崎 1980年冬」正誤表

ページ	段・行	誤	正
4	8	キリスト教釜ヶ崎医療連絡会	キリスト教釜ヶ崎医療連絡会
11	下・19	中沢 清美	中西 清美
23	上・4	20ページ	22ページ
25	下・10	相談室	相談室
25	下・24	表1~表	表1~表23
26		何をしたか	何をしたいか
49	上・6	専 体	自 体
52	中・22	問題的	問題点

第十一回釜ヶ崎越冬闘争支援を終えて

はじめに

キリスト教のグループが越冬闘争支援をはじめ、今年七回目になる。最初の一回（一九七四年度）は、協友会が単独で支援にあたった。以後の六回（一九七五年度）は、協友会と関西キリスト教都市産業問題協議会が共同で活動した。一九七七年以後は、合同でキリスト教釜ヶ崎越冬委員会を組織し、労働者が組織する釜ヶ崎越冬闘争実行委員会の諸活動を支援してきた。

今年も、労働者の組織が、釜ヶ崎日雇労働組合を中心とするグループ（夜間パトロールなど）と炊き出しの会、結核患者の会を中心とするグループ（炊き出しなど）に分れて活動したが、わたしたちは両者のグループと連絡をとりながら、支援活動を続けた。労働者の組織が一本化しなかったことで、支援するわたしたちは、正直なところいろいろな点で困難に出あった。しかし、わたしたちは、一九八〇年十一月十五日にキリスト教釜ヶ崎越冬委員会を組織し、一九八一年二月二十八日まで、支援およびわたしたちの越冬テーマ「釜ヶ崎の医療―特に結核」に焦点を絞り、活動を続けた。三月以降は、キリスト教釜ヶ崎医療連絡会に改組し、引き続き労働者の結核

の完治を求めて働いている。

行政への要請

わたしたちは、労働者自身の行政への要請とは別に次の二点を大阪市長に要請した。ときあたかも「人権週間」であり、わたしたちは、回答に期待をもったが、結果は無惨であった。

「わたしたちは、釜ヶ崎の労働者がかかえている諸問題は、単に『社会福祉問題』ではなく人間の尊厳にかかわる『社会正義の問題』ととらえています。人権週間にあたり、大阪市が、釜ヶ崎の労働者の人権を視野に入れた人権行政を今後おしすすめることを特に要望します。

(一) 今冬は、社会医療センターの軒下や路上で病弱・高齢・「障害」の労働者が青カン（野宿）しなくてはならず、血のかよった人間尊重の行政を大阪市は、どのようにすすめますか。

(二) 結核予防法第二条を守り、釜ヶ崎から結核を根絶するために、大阪市は民間のボランティア活動に甘えることなく、抜本的対策を立て、明らかにしてください。

以上の二点について具体的な対策を来る十二月二十五日まで文書

で回答ください。

一九八〇年十二月一日

この要望に対する大阪市の回答は、民生局からの次のような電話一本であった。

「十二月二十九日、三〇日に大阪市更生相談所で面接・受け付け（筆者註 病弱・高齢・「障害」の労働者）を行い、臨時宿泊所（大阪南港）に八〇〇人、病弱者は自強館に二〇〇人収容する」
十二月三日午後

この不当な回答に対しては十分な対応ができなかった。しかし、結核に対しては、労働者グループと共闘し、第一回一九八〇年十二月二十六日対西成保健所、第二回一九八一年一月十七日対大阪市環境保健局と話し合いを持つことができた。これには、民生局よりいくらか人間的な応待があった。この二回の話し合いは、あらかじめ要望書（十二項）を出し、それに基づく交渉であった。要望は、「入院必要患者の結核ベットを保障せよ」「夜間にもレントゲン検診（月一度西成保健所は、地域にバスでレントゲン検診に来るが、それが月末の十時～十二時で労働者が集りにくい）を行い、結果はすぐ本人に知らせよ」「釜ヶ崎労働者の結核入院患者の追跡調査を行ない、その結果を公開せよ」など、ごくあたり前のものであったが、保健所・環境局は言を左右に確答をさせた。わたしたちは、行政が、結核予防法を遵守する気持があるのかと疑わざるをえなかった。

釜ヶ崎の医療―特に結核

一九七八年度の越冬以来、わたしたちは釜ヶ崎の医療とくに結核に焦点をあわせて活動して来た。その具体的な歩みの一つが、昨年

度からはじまった結核ケースワーカー入佐明美さんの活動である。入佐さんは、七九年度の越冬後も社会医療センターでの実習、結核患者との面接、地域内（公園や路上）における労働者の医療相談など年間を通じて釜ヶ崎の結核と取り組んで来た。活動の一端は、社会医療センターの手でまとめられた「大阪社会医療センター通院患者における要入院肺結核患者の社会医学的調査（第二報）」に見ることが出来る。

わたしたちも年間を通して、病院訪問あるいは入院患者交流会などを計画し実施した。このような努力にもかかわらず当初の目標―一人の結核患者が完治し、自立して生活していくという結果をうることはできなかった。

八〇年度の越冬では、前年度の活動の反省のうえにたち、「一人の結核の労働者が完治していく」を合言葉に越冬活動に入っていた。もちろん例年通りに夜間医療パトロールもした。夜間医療パトロールは、一九八〇年十二月二十五日から一九八一年一月末まで続けられた。二月末までどのわたしたちの願いもあったが、労働者グループの方針もあり、パトロールは一月末で終え、二月は昼間の活動に力をいれ、一人でも青カンする労働者をなくすることに力を注いだ。労働者グループの方針は、入院の必要なものは入院治療をうける、労働できるものは就労し、青カンをなくするというもので、一定程度の効果をあげることができたと見えよう。

結核に対する取り組みは、入佐さんを中心に医療相談、入院、病院訪問、退院後の相談などさまざまな活動を続けた。さらにこの活動を充実させるため専任者として土井美保子さんが今越冬から働きはじめた。フルタイムスタッフ二人ということになる。また越冬期

間中に、釜ヶ崎ボランティアの会を結成発足させ活動の側面からの援助の充実を計った。

このような活動を続けるためにも経済的な基盤が必要である。六〇〇万円の全国募金をしたが四月末で六五〇万円のカンパがよせられたことは感謝である。

二月八日に越冬中間報告集会、同じく三月八日には越冬支援総括集会をもち八〇年度の越冬を総括したが、三月からは前述の通り、「釜ヶ崎の医療」をテーマにキリスト教釜ヶ崎医療連終会が発足し十月まで活動を続けることを申し合せている。

しかし、越冬が終わったいま、釜ヶ崎には不況が押しよせ就労できない労働者が街にあふれている。越冬期間中の炊き出し利用者は、一日の合計が二〇〇人強であったが、現在は夜だけで二〇〇人を越える労働者が炊き出しで空腹をしのいでいる。わたしたちは、再度釜ヶ崎では健康が、労働問題と密接な関係にあることを認識するようにはせまらされている。

(一九八一年五月)

1980年釜ヶ崎越冬記録

1980.11.1981.2

1980年	11月15日	一九八〇年度キリスト教釜ヶ崎越冬委員会が結成される。
	22日	代表・小柳伸顕 会計・谷安郎 結核ケースワーカー・入佐明美 第二回キリスト教越冬委員会。
	26日	募金(目標六百万円)、越冬セミナー、ボランティアのための結核の話、行政への働きかけ等について話し合う。
	27日	越冬闘争実行委員会(越冬実)が結成される。
	29日	大阪市は青カン労働者の狩込みをした。
	12月1日	第三回キリスト教越冬委員会。炊き出しの会等との話し合い。
	6日	越冬実医療班 第一回会合。
	7日	医療券の発行について、期間八〇年一月二五日～八一年二月二八日、朝九時の炊き出し時(但し、一月二九日～一月三日は医療センターの都合で一二時の炊き出し後に発行)。
	8日	労働福祉センターの一時金支払い日、越冬実カンパ活動。
		第四回キリスト教越冬委員会。
		越冬の活動について話しを聞く。
		一時金支払日。越冬実カンパ活動。
		ボランティアのための結核の話 所・喜望の家 講師 羽曳野病院 山口匡医師



▲ 越冬中の炊き出し

9日

時…一四時～一六時 参加者一〇名
大阪市へ要望書提出。

(一) 今冬、社会医療センター軒下や路上で、
病弱・高令・「障害」の労働者が、青カン
(野宿)しなくてはすむ、血のかよった人間
尊重の行政を大阪市は、どのようにすすめ
ますか。

(二) 結核予防法第二条(注 結核対策の責任
は自治体行政にあると義務づけている)を
まもり、釜ヶ崎から結核を根絶するため
大阪市は、民間のボランティア活動に甘え
ることなく抜本的対策をたて、それを明ら
かにしてください。

以上の二点について具体的な対策を来一
二月二十五日まで文書でご回答ください。

越冬セミナー委員会

10日

第五回キリスト教越冬委員会

越冬実医療班から報告

・朝九時炊き出し↓依頼券発行↓医療センタ
ーへ↓医療センター紹介状↓一時の炊き出
し後市更相へ↓面接の結果の確認(入院、
却下、その他)全過程が終了するまで一緒
に行動(終了四時半)

越冬セミナー委員会 参加者、予算を決め
る。

16日

18日

第13回(仮称)釜ヶ崎夜間学校
テーマ…越冬と病氣 参加者一四名

支援連帯集会 参加者約九〇名

所…芦原橋解放センター 時一八時～二二時

金井愛明氏がスピーチ

第六回キリスト教越冬委員会

医療相談・パトロールの責任者を決める。

越冬実・医療センター、消防署へあいさつに
行く。

医療センターへパトロールのための
薬を取りに行く。

入院患者へのクリスマスプレゼント(靴下)
を包装。

大阪市民生局より、大阪市の越冬対策につ
いて以下のような電話があった。

「一二月二九日・三〇日に大阪市更生相談所
で面接・受け付けを行い、臨時宿泊所(大阪
南港)に八百人、病弱者は自強館に二百人収
容する。」

喜望の家倶楽室・夜間学校が主催し、倶楽
室でクリスマス会が開かれた。参加者約五〇名。

越冬実決起集会 雨で中止

協友会クリスマス
越冬闘争始まる(労働者側が、炊き出しの
会、越冬実に分れている)青カン者総数百一名。

25日

24日

23日

21日

20日

19日

26日

喜望の家倉庫にある布団をセンター前まで
運ぶ。

医療センターで診察後市更相へ相談に行く
つきそいの労働者を警察妨害、市更相へ入れ
ず、一月六日まで妨害つづく。

越冬実の日常活動

六時…ふとんあげ

七時半～九時…医療券発行

一六時…おにぎりの準備

二〇時…布団敷き

二二時…夜間パトロール・警備

越冬実・パトロール前におにぎり配布一回平
均約百五〇個、残りはパトロールの時
持って配る。

炊き出し 九時、一三時、一九時の三回

・年末一時金の支払い(大阪港の会
館で)

保健所と団体交渉

参加者 保健所側…次長 保健予防課長 同

係長 西成分室主査 庶務

係など八名。

越冬実側…越冬実 釜日労 キリス
ト教越冬委 被爆者の会な
ど計一一名

・越冬対策について話し合う。

一九八一年
1月1日

31日

30日

29日

27日

キリスト教越冬委の活動について、医療セ
ンター本田良寛氏と連絡をとる。

センター前の布団にシノギが出没した形跡
あり。

越冬実 医療センター前で徹夜の警備態勢
に入る。

第七回キリスト教越冬委員会。

市更相で臨時宿泊所の受け付けを行なう(一
〇時～一五時)

越冬実 おにぎり配布にあわせてみそ汁を
配り始める。

臨時宿泊所の受け付け。

こどもの里でもちつき大会、臨泊の受け付け

第五回越冬セミナー開かれる 参加者一三名

テーマ…釜ヶ崎の医療―特に結核

責任者…ハインリッヒ神父 専従者…入佐明美

第一四回(仮称)釜ヶ崎夜間学校

テーマ…今年の包負を語る 参加者一三名。

越冬セミナー2日め

病院訪問、衣類整理、パトロールに参加等、

入佐さんが一年間取り組んできた結核につい
て話す。

越冬実 三角公園で新春団結もちつき大会
(四斗を二ヶ所ずつ)

2日

3日	越冬実 医療券発行枚数一一六枚を記録。 越冬セミナー最終日 バザー、反省会、全員で会食(於…ふるさと の家)礼拝。 第八回キリスト教越冬委員会 中間報告集会 病院訪問体制について話す。 ソフトボール大会 所…東大阪職業訓練所 参加者約七〇名 大阪市に要求書をもっていき、冬期の対策 について話し合いを求める。その後、南港の 臨時宿泊所へ行く。 センター仕事始め 三九件二六六人 アブレ (雇用保険)一万二九〇人 青カン者総数一 三九人 第一五四(仮称)釜ヶ崎夜間学校 テーマ…「人夫出し」について 参加者一四名 臨時宿泊所 終わり 青カン総数一六五人 第九回キリスト教越冬委員会 中間報告集会について、内容を検討。 青カン労働者に対してアンケート調査を行 う。 アンケート調査、二日間計一一六名 越冬実 市民館で「越冬討論集会」参加者 約八〇名。 第一六回(仮称)釜ヶ崎夜間学校
4日	
5日	
8日	
10日	
12日	
13日	
14日	
15日	

17日	テーマ…趣味について語ろう 参加者一一名 大阪市環境保健局との話し合い 参加者 大阪市側…結核予防係長など五人 越冬実側…越冬実医療班、被爆者の 会、キリスト教越冬委六人 ・結核対策について話し合う。 パトロール時のおにぎり、みそ汁の配布打 ち切り。 第一〇回キリスト教越冬委員会 パトロールの状況、越冬実の活動報告等。 炊き出しの会、結核患者の会がデモを行っ た。 越冬実アンケート再開(三〇日を除き連日) 越冬実 以後医療券発行を医療センター前 に止めたバス「勝利号」の中で行なう。 第一七回(仮称)釜ヶ崎夜間学校 テーマ…越冬と病気の2 参加者一二名 島田病院より空開さん退院、長柄寮で療養 する。 第一一回キリスト教越冬委員会 越冬実医療班の活動報告等 中間報告集会の案内を発送 第一八回(仮称)釜ヶ崎夜間学校 テーマ…日雇労働について 参加者一一名 市民館で、労働者と二月からの活動につい
18日	
19日	
22日	
24日	
27日	
29日	
30日	

1月20日 31日	入院・入寮 。入院者二一名 。一時保護所一二名 。自置館一名 計三四名
2月5日	第一九回(仮称)釜ヶ崎夜間学校 テーマ…労働について 参加者一六名 第一三回キリスト教越冬委員会 中間報告集会の打ち合わせ等 釜ヶ崎越冬支援中間報告集会 所…天王寺カトリック教会 時…一八時三〇分～二一時 参加者…約六〇人
7日	
8日	
9日	中間報告のピラ発送準備
10日	中間報告のピラ発送
12日	第二〇回(仮称)釜ヶ崎の歴史 中間報告のピラ発送
14日	第一四回キリスト教越冬委員会

て話し合う。その結果、一月いっぱい、パ
トロールそれに伴って布団敷き、警備は終了
することになる。医療班は継続する。
第一二回キリスト教越冬委員会
パトロール終了後、昼の活動に力をいれてい
くことを話し合う。

3月1日	喜望の家の窓口の強化について 第一回ボランティアの会 参加者約二〇名 医療センターにおいて結核の話 本田良寛氏 第二一回(仮称)釜ヶ崎夜間学校 テーマ…越冬と病院 喜望の家世話人会 第一五回キリスト教越冬委員会 三月以降の活動・総括集会について話し合う 第二二回(仮称)釜ヶ崎夜間学校 テーマ…悪質飯場と労働者の生命 第一六回キリスト教越冬委員会 協友会例会 喜望の家バザー 第二三回(仮称)釜ヶ崎夜間学校 テーマ…釜ヶ崎の歴史(2) 越冬支援総括集会
26日	
28日	
5日	
8日	
17日	
18日	
19日	
20日	
21日	

今年の越冬の特徴

妹 尾 美 喜 夫

① 今年の越冬の特徴について書くように言われましたが、毎年毎年、年末年始に労働者が味わう苦しみは同じで、特に目立つ特徴と云うのはありません。

強いて上げれば、今年は幾分、「青カン」している労働者が少なかったこと、例年よりは、医療券で診察を受けた労働者が多かったことが上げられます。

又別の点では、今年は、越冬闘争実行委員会（以下越冬実・地域の労働者で組織）が実質的に分裂したこと、大阪社会医療センター（以下医療センター）前での布団敷きとパトロールが一月三十一日で打ち切られたことが上げられます。

「青カン」が幾分少なかったことは、パトロールの時などによく感じたことですが、そう確かなことではありません。数字の上では前年の一日平均の一八〇人に対して、今年は一五〇人に減っています。

確かな事が言えないと言うのは、固定的な窮乏層は、パタヤさんとなつて、私達がパトロールで回る区域外で、「青カン」する傾向があるからです。

だから、ましてや、行政の対応がよくなって、「青カン」が減ったとしても言えません。困窮が進むにつれて、目につかなくなりいつのまにか死んで行ってしまうと言うのが釜ヶ崎の行旅病死の特徴ではないでしょうか。

第2の、今年は医療券で診察を受けた人が多かったと言うことですが、昨年は一月二十五日から、二月二十九日まで発行した医療券は延べ四二三枚でした。

今年は一二月から一月三十一日までに越冬実医療班が発行したもので五二三枚に達しています。これに、今年は越冬実が分裂した為別固に発行した、「炊き出しの会」のものとキリスト教越冬委員会が発行したものを加えると昨年よりはるかに増えていることがわかります。

特に一月二日に越冬実が三角公園で、新春団結もちつき大会を行なった時には、一一六人の人が診察を受け、医療センターを驚かせました。

今年の場合、診察の結果、要入院と診断された人は最終的には一〇〇名入院しました。しかし、そのうちわけを見ると、四九一人の実診察数のうち七三人の要入院者に対し、市立更生相談所から入

院した人は、二四人で、三四%にとどまっています。

そして、このような市更相の対応が、川原さんのようなケースを生み出していることは忘れられてはなりません。

一方、今年は、昨年末まで越冬実に参加していた「釜ヶ崎結核患者の会」「炊き出しの会」が、意見の不一致の為越冬実に参加せず、分裂したまま越冬闘争が行なわれました。その為、例年の朝、昼、夜の炊き出しは、「炊き出しの会」が西成署裏の公園で行ない、医療券も今年は二ヶ所で発行されることになりました。「結核患者の会」「炊き出しの会」は朝の炊き出しの時公園で、越冬実医療班は医療センターの前で発行することになりました。

越冬実はその他の活動として、炊き出しのかわりに、夜一〇時のパトロールの時にオニギリとミソ汁を一月一七日まで配りました。もう一つのパトロールと布団敷きが一月一杯で打ち切れ、実質的に、一月一杯で越冬が閉じられた事については、特にキリスト教越冬委の方で賛否、両論ありました。

このことは主に越冬実の方針によるものですが、まず実態を把握する為に一月一二、一三の両日医療センター前でアンケート調査が行なわれました。さらに実態の把握と、一人一人に即した解決の方法を考える為に一月一八日より連日アンケート調査が行なわれました。

病気の人のについては医療券で診察してもらい、入院が必要な人は入院するように、元気な人については仕事に行くように、現金求人（悪者の労働者選別）が厳しく、飯場は条件が悪い為仕事に対して無気力になる労働者が多いが、労働条件が悪ければ仕事に行く中で具体的に皆で変えて行こうと言うことが、徹底して繰り返

し強調されました。

その結果、医療センター前の布団を利用する人の中から病気の人の比率が下がり、元気な人で仕事にアプレた労働者が大半になりました。このことをふまえて、越冬実が一月三〇日に市民館で集会を開き、参加した労働者と話し合った結果、一月三〇日で布団敷、パトロールを打ち切ることになりました。

後にキリスト教越冬委の総括集会では、二月に入ってから寒波が押し寄せ凍死が相ついでに起こるにより、パトロールだけでも、もう少し続けるべきではなかったかと言う意見が出されました。ただ、パトロールや布団敷が根本的な解決にならない以上、打ち切りはやむを得ないものがあったと思われれます。ただ、緊急にパトロールが再組織されれば、幾人かを凍死から救うことができたのではないかと、悔いが残る所です。

② 越冬が終わって半年が過ぎようとしています。今釜ヶ崎では、その後求人が極端に落ち込みアプレが深刻になっています。

そのような中で二月二三日に、三重県のタコ部屋中沢組が警察によって摘発されました。それによると、中沢組の経営者、中沢沢夫は去る一月一五日に三重県の飯場内で日雇労働者中沢清美さん（四八）を逃げようとして角材などでなぐり殺し、大阪南港の空地に捨てたと言うものです。

仕事が減って来て、多くの労働者が飯場に行くようになる時、ますます労働条件が切り下げられ、この種の暴力事件が増えてきます。越冬、と言え冬だけの問題のように聞こえますが決してそうではありません。いわば年中が、冬、の状態ですが、文字通りの冬

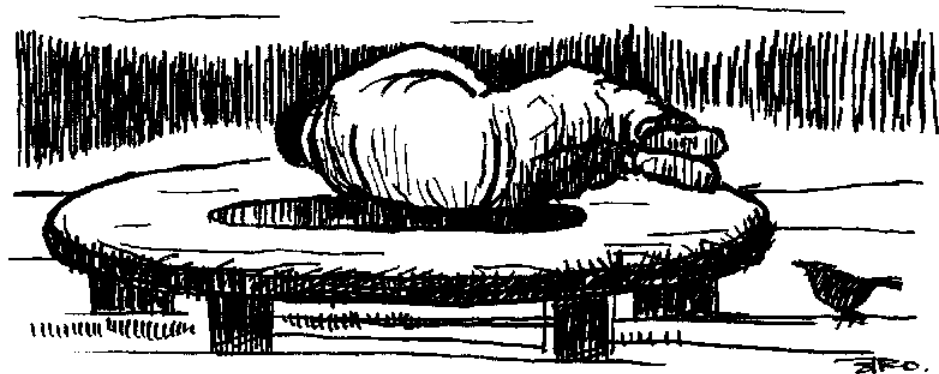
には、寒さが加わることによって総仕上げをすると言いうことが言えます。

私達は、一人の死者も出さず、をスローガンにしていますが、最初の頃の越冬委員会の話し合いではその事に対する疑問も出されました。それは現実的に不可能だし、逆接的な言い方ですが、冬場だけの取り組みだけでは不可能だからです。

私はさらに、福祉的な発想だけではもはや取り組みめないのではないか、と言うことをつけ加えたいと思います。

なかなか入院しない病気の労働者に対して本人の「やる気」と言うことが言われますが、やる気も自分の労働が正しく社会から評価されない所ではできません。

同じく、仕事がないと言うことは飯が食えないにとどまらず、生きていく目的の一つ——何物かを生み出していく——が欠落していることに他なりません。労働の問題は確かに難かしいものがありますが、果たして本当に取り組むことはできない事なのでしょうか。



越冬に参加して

初めて越冬に参加して

「釜ヶ崎と教会」というテーマで越冬にかかわったのであるが、それが「日雇労働者とキリスト」というテーマに変わっていった。というのは釜ヶ崎を一つの集合体として把握する時、そこではひとりひとりの日雇労働者の顔が見えてこず、問題解決の糸口さえ、ポロとして見えてこないという限界があるからだ。

さらに、教会をキリストと変えたのは、教会のイメージがあまりにも固定化したものとなり、キリストの命が見えてこないためである。

大切なことは、ひとりとの交わりを深め、ひとりとの関係の中で、キリストと共に生きることであろう。わたしとAさんとの関係、わたしとBさんとの関係を大切にしたい。

越冬において、あるひとりの人と関係を深めることはできなかった。しか

し越冬は、そのような関係を育てる以前の、最も基本的な働きかけだと思ふ。「一人の死者も出さず」というスローガンは、越冬の基本姿勢だと思ふ。まずは、生きていることから次の一歩を踏み出すことができる。

越冬は生命の尊厳に根ざしていると思ふ。

三浦 恒久

初めて越冬に参加して

何故、カマがサキのエトウに行くのか？それは自分にとって何を意味するのか？慈善の意ではあるまいにヤ、釜ヶ崎は、私のこれまでの「生」を覆った場であるから——多くの人々の辛苦の上に跌坐をかいていた自分の生を——。

釜ヶ崎には、多くの人権を剝奪され、独り生き、死んでいく（殺されている）人がいる。女である私が夜間パトロール等に参加しやすいベースが備えられ

ている。色々と思惑していたが、私が女であり、ホームベースを持つ者であり、現状を甘受している私の闘いを釜で行い、それを厳格に受け留る為に私は釜に行った。

自分の闘いの場に釜が必要なのは、私の弱さの何ものでもなく、釜を利用して何ら変りない自分に、深い憎悪を感じつつ、それと闘う他なかった。その痛みを背負わねば一歩も前進し得なかった。胸打ち、嗚咽しつつ——。

コンクリートに囲まれた釜の冬は寒い。冷たさがしんとしみてくる。道端に寝ころんでいる人に聲は聞かれない。お昼は大丈夫という変な安心もある。彼らなりの生活もある。人が多い。何故、夜ならば一人一人に声をかけるのか？生命の灯が消えるのをくいとめたい／＼しかし、毎日、昼夜のそれを繰り返さざるを得ない「おじさん」と我々は何であるのか？相互の間に何かがあるのか？コンクリートの冷たさがしんと浸ってくる。昼も夜も、道で寝ている人を異常だとは思わなく

なっている。「また、いやはった」という調子、尋常ではないというのに、異常と思わなくなっている。馴らされてしまっている。

道で人が凍えている。青カンしている人がいる。夜、パトロールをする。一人一人のおじさんの生活があり、思考がある。私の価値感では図り得ないものがある。しかし、人間がこれ程までに生命の危機に晒されてよいものだろうか？明らかに人権を剝奪されている。憤怒が体中を巡る。「おじさん」はこの怒りを感じないのか？拳を握る。この「怒り」を私は奪われていた。感じずに済む世界をつくられていた。より強く胸打ち慟哭する。

一つだけ進歩したのは、何人かの人と「おじさん」「ねえちゃん」の関係でなく○○○○さんと脚本文子に成り得る。一人の人間としての氏名をとり戻すことができた。一人一人との出会い。私の闘いノ今、○○さんたちは、病院を一度出て再入院したり、行先知れずだったり。願わくば人間として自分の思うところを生きていくくださら

んことを。が、私自身はその一人一人との関係を継続しきれずに安閑としていた。許すまい、この自分を善処せよ、人の痛みを背負いきれない自分の痛みを背負い続けよう。それが私の闘いだから。

釜の越冬は夜間パトロールだけでなく、昼も無断続いている。冬を越える為に冬を迎える為に、釜の解放に向けて毎日毎日が闘いである。そして、その一日を労苦して下さっている方々。頑張っている○○さん達。

私は釜に行来する人間でしかないが、弱く許せない自分、怒りを持つ自分、こだわりを持つ自分、痛みを持つ自分を釜のおじさんに十四日間の簡易宿泊所を与える様にバンソウコウを貼ってごまかすのではなく、根底から受け止め、負い続けこの弱さ、痛み故にそれを力として歩み続けたい。そうその力につきうごかされるのだ。そして釜から与えられたものをいつか必ず還元し得る様、日々努力して生活したい。

脚本文子

パトロールに参加して

二月の末、寒さの厳しい朝であった。飢と寒さと病苦に打負けて、一人の労働者が凍死している姿を見た。古里があっても帰ることも出来ず、妻子があっても逢うことも出来ず有って無い、孤独な生涯の幕を、絶望と不安と、病苦の中で閉じてしまった。一人の人間。

虚しい心の旅路を彷徨う、労働者の終着駅は、行路病死であるのだろうか。年間をじてこの様に死んで行く人は、三百名を越えるとか、パトロール、それは、人間の生命の尊厳に對する服従である。そこに私自身の生命がある。一人の人間の生命は地球よりも重い。

「友のために、生命を捨てる愛より、深い愛はない」

聖言葉が私を勇気づけて下さる。

谷満繁

越冬パトロールに参加して

日本の社会構造を底辺で支えているのが「釜ヶ崎」だ、などと分析してみることは大切なことだが、いや、まさにそこを打たなければ何にもならないのだが、「一人も死者を出さない」闘いは何にもまして緊急性をもって、そして又継続されなければならない。

「今晚は冷えるな、死人がでるかもしれないな」というパトロール仲間の声に、ともすれば青カン者の数を確認し、ただ歩くだけではなく、とにかく声をかけ、できれば話をするのが必要だ。勿論、不特定の人々で「対話」といえるものではないが、それでも短い時間で仕事とことや病気のことで話を聞き、我々でできることはわずかなではあるが、理解を深めることができる。

私はふだん、何もできぬものだから、夜のパトロールだけに参加させてもら

っているが、ことは決して労働者だけの問題ではなく、参加する我々自身についても自立と解放を目指すものでなければならぬ。パトロールが終わると、時々重苦しい気分がさせられる。逆に我々が「見られている」こと、気がつくからである。

後藤 聡

パトロールに参加して

その日は、大晦日で、午後十時頃には、センター前には、四十人程の人が、ふとんにくるまっていた。新聞のニュースで知っていたつもりだったが、その現実との差にすごいショックを感じた。

コンクリートの上にゴザを敷き、その上に夏のふとんに、ボロの毛布、体をかかえ込む様にしてくるまっていた。南回りについて行く。そして三角公園についていた。何年前には、テントが張られた所だ。

たくさんの方が、たき火をしている。酒に酔っている人もあれば、病身なのか、灰まみれになっても身動き一つしない人。真冬の空の下で、一晩とう過すのだろうか……。

ともかく、体の具合の悪い人や、ケガをした人達は、センター前へ保護をした。最後にセンター前で、保護者や、カンの人達の連絡があり発表されるのだが、聞いてはいなかった。一晚のパトロールで見た現実、最初に受けた以上のショックを再び感じていた。このまま帰る事に、こだわりを感じた。家族も居れば、暖いふとんがある。その自分と、この人達との関わりって何や……。

家に帰り床についても、長い間寝つかれなかった。

パトロールは、一月末で終わったが、自分がかもつと、釜ヶ崎と関わりたいたいと、パトロールは冬だけでいいのかと、言う疑問とで、今でも、金井先生と毎水曜日に、廻っている。

梅村 登志和

病院訪問

地域にある病院を訪問し始めて一年半になる。「ようけ来んかったな、病気がしとったんとちゃうか？」訪問は週に一回と決めているがたまたま、二週間振りに顔を出すとこんなことばで迎えられる。

はじめは「いかがですか」「お大事に」と余りことばをかわすことがなかったが、この頃ではお互いに会話が多くなった。

入院生活四年、六年位の人は珍らしくない。自分の病気は治るのだろうかという不安、健康には自身があったのに病気になったショック、あちこちの病院を転々としたこと等、ぼつぼつ話されるのを聞くと、次の訪問日の足どりが重くなる。しかし、家族との音信も途絶え、見舞いに来る人もいない患者さんたちにとって、「こんにちわ、いかがですか」と声をかけ、シンドイ

話を聞くことが少しでも喜びであれば

・・・と思う。

広島出身のMさんは昨年十一月に他の病院に移ったが、移る前のMさんはまったく歩かず、いつ行ってもベッコに横たわっていた。二月にMさんを訪問した時、どンドン歩いてトイレに行き、洗濯さえも自分でするというMさんが同一の人とはどうしても思えずにいる私を、Mさんはおだやかな笑顔で迎えて下さった。私は、あのMさんの美しい笑顔に会いたくて、三十分の道のりをベタルを踏んで訪問に出かける。

重野 了子



病院訪問

長い寒さからようやく解放され外の日だまりにほっとしたかのよう、しゃがんでいる人々、暖い笑顔で、おはようを迎えて下さる。

ああ今日も訪れてよかった。このほほえみに励まされて病室に入る。この病院にあの病院に教知れぬ多くの人が人生に疲れ労働の重さに倒れ、又年老いてあるいは不慮の事故のため予期しない人生の試練の中に一日も早く解放されることを心の中で叫びつづけている。釜ヶ崎の病む人の苦しみは深い。自分自身を大切にするために忍耐することから始めねばならない。共に働き酒を飲む仲間からはなれ、孤独の中にじっとこらえている。少し良くなると耐えられずしてとび出す。その結果は良く知っているんだが・・・オレの意志は弱いんだと言いながら酒を飲む自分の弱さのはがゆさを怒りそしてお

つける、自分のような者誰れが心にかけてくれるか。

又いやな思いをしながら入院する。このくり返しの中で考える。病院は病む人は病院のためではないだろうか。しかし、治して「やる」治して「いただく」この「やる」と「いただく」の間に絶体的な権威その威力が狭まり「いただく」者にとってはすべて受身、自分の体であっても自分の病いの状態を知る権利が奪われる。自分のためによかれと遠慮しながら相談する、それを聞きたいことの10ほど、そのおどおどにつけこむかのように叱つたりする。しかたなく「いただく」身は、すみませんとさがる。又長い闘病生活をしている、薬が変わったことはもちろん注射の仕方、看護婦の足音にも敏感になり、状況判断をし、それに対処するすべを覚える。こんなことがあった、注射の薬の間違いを知り、びっくりして医師に知らせる、医師は自分のブライドを傷つけられたくない。カルテをくり間違いを知りながら白ける。お

まえ何故それを早く言わないのか、「前に言いましたよ」医師はブイッと部屋を出る。患者はブツブツ煮えきらない気持と不安で怒りすらこみあげてくる。して「いただく」身の弱さ、これも行路病者だからだろうか。又病いの重荷だけでない。時にはもったいたたまれな気持になる。部屋で共に顔を合せている中から思いがけなく発生する心の行き違いである。環境も性格も二人と同じものでない違いの集りがある時おつかって、当然なんだがやり切れないさを感じる。ゆるすこと救されることなのなんとむつかしいことか。しかし、そう言ったことは、まあなんとか一日一日を送る中に消えて忘れることも出来る。心の貧しい人は辛い、とおっしゃったキリスト。釜ヶ崎の老人が一人、誰れ知ることなく神の御手に抱かれた。その時を知って知らずか、しきりと私は勝手気ままをしたのに、私のようなものを訪れてやさしい声をかけて下さってありがたうよと言った言たっけ。「私のようなもの」と自分を知って始めて、「いただく」身

のつぶやきでなく感謝の心がほつほつと湧いて来たのだろうか、ぶつぶつ煮えきれない心が煮えきる時、ほつほつと喜びに変わるのだろうか。

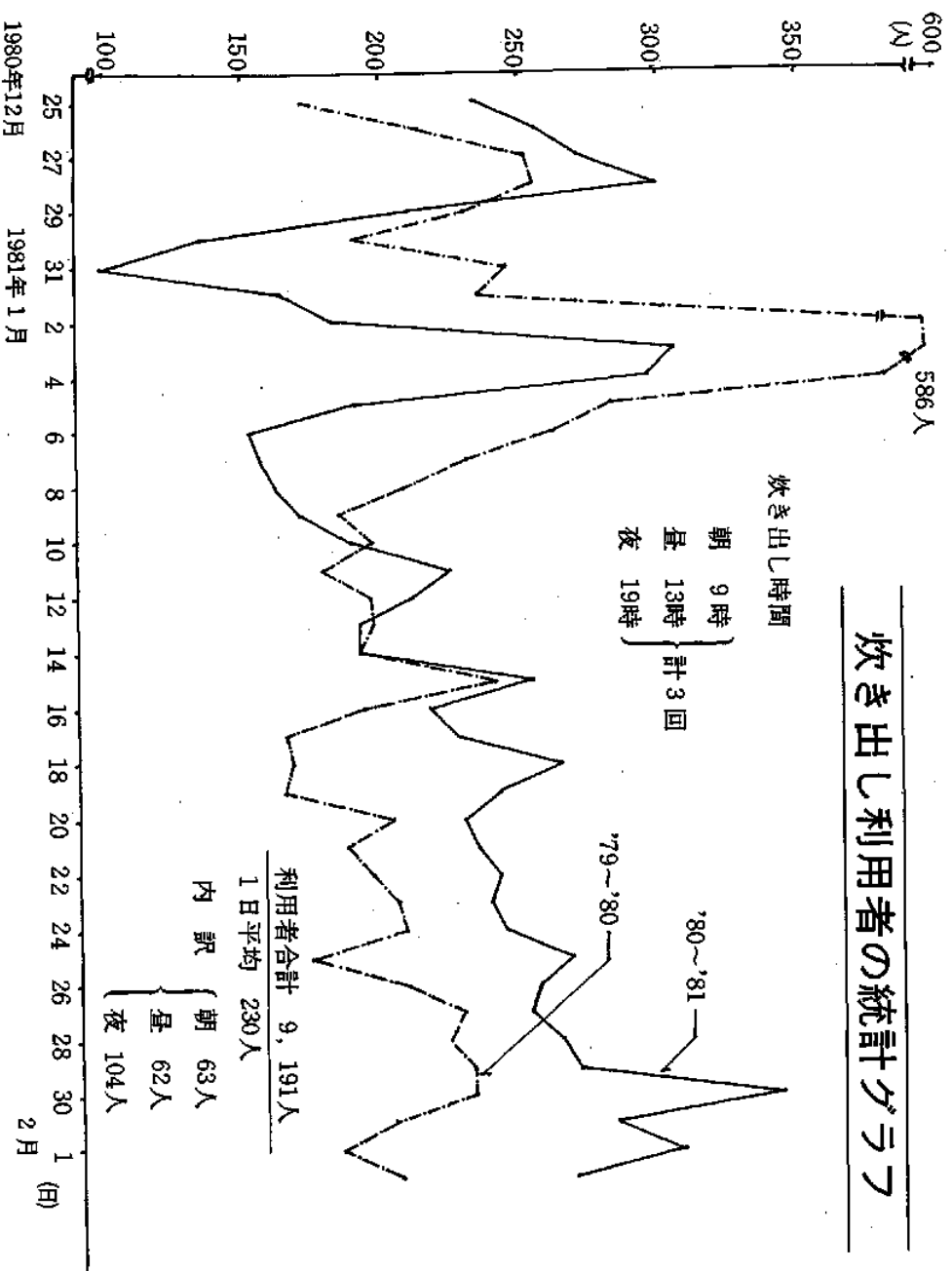
あの日だまりの中で病む人の笑顔が、訪問に向う足を強め心に勇気を与えて下さる。

汗と力を出しきって苛酷な労働に従事し病む労働者たち、彼らをもっと理解しつぶやきも怒りも共有し、ほつほつとした喜びにつなげていきたい。

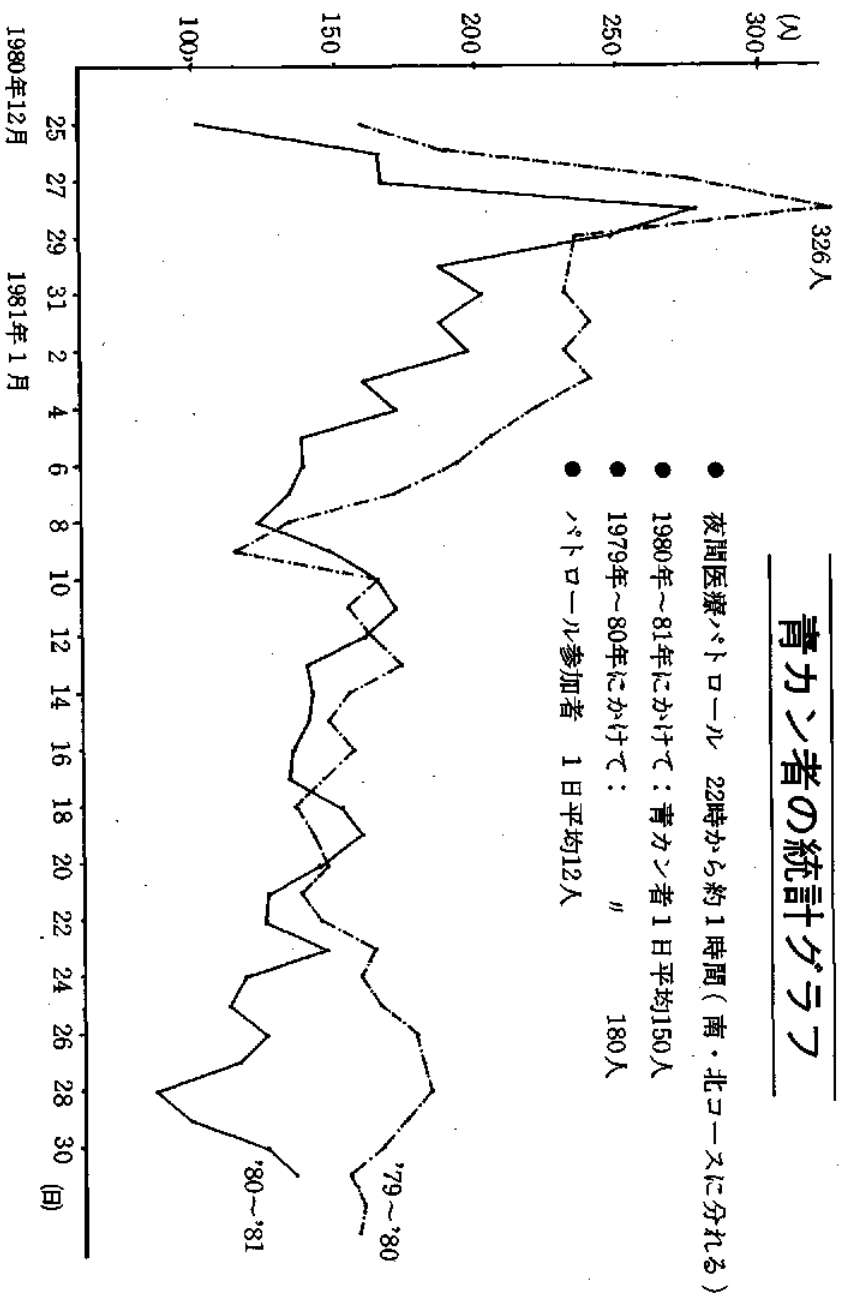
シスター・岡風呂



炊き出し利用者の統計グラフ



青カン者の統計グラフ



第五回越冬セミナー報告

プログラム

	午前	午後(1)	午後(2)	夜間
1月1日		2:00 受付 オリエンテーション (ハイソリッピ) 夕食	7:00 スライド (妹尾) 越冬の歴史と問題点 (小柳)	9:00 パトロール オリエンテーション 10:00 パトロール
1月2日	9:00 医療相談 炊き出し手伝い	1:00 病院訪問 断酒会	7:00 結核患者の調査発表 (入佐)	9:00 パトロールまたは 話し合い
1月3日	9:00 パザー 衣類整理 11:00 反省会	1:00 全員で会食 於ふるさとの家 2:00 礼拝(重野) 2:30 解散		

はじめに

今年度も「釜ヶ崎越冬セミナー」を開こうと、準備し、十一月に次のような案内を教会や個人に送った。

いよいよ、十二月二十五日から、釜ヶ崎越冬支援の活動に入ります。わたしたちは、今越冬のテーマを「釜ヶ崎の病氣」とし、特に結核をなくすための医療活動を中心にするつもりと考えています。そこで恒例の「越冬セミナー」も、越冬支援活動に参加する中で、釜ヶ崎の医療問題を現場を通して共に学習しようとの目的で下記のとおり行います。釜ヶ崎の医療に関心のある方がた、および医療ボランティアとして今後とも釜ヶ崎に関わる人の参加を望んでいます。ふるって参加してください。

日時 一九八一年一月一日(日) 午後二時～三日(出)午後二時
会場 喜望の家
テーマ 「釜ヶ崎の医療(特に結核)」 (以下省略)

1 参加者の顔ぶれ

参加資格は、(一)全期間参加できる人 (二)十八才以上のキリスト教に理解のある男女である。参加者は男八名女五名計一三名になった。内訳は学生五名(うち神学生二名)、シスター二名、司祭、大学講師、YWCA職員、ICYE職員、看護婦など。地域別にみると、滋賀一名、大阪一名、静岡一名、神奈川一名、東京七名、宮城二名、東京からの参加がめだつ。キリスト教の教派では、カトリック教会、福音ルーテル教会、バ

プテスト教会、聖公会、YMCA関係と多岐にわたる。

2 プログラム

プログラム全体については、二〇ページを参照してほしい。今年度のテーマである「釜ヶ崎の医療(特に結核)」について、一月二日午後七時、「大阪社会医療センター通院患者における要入院肺結核患者の社会医学的調査(第II報)」をもとに報告があった。報告者はキリスト教釜ヶ崎越冬委員会所属の結核ケースワーカー入佐明美さんである。一九八〇年五月二日より八月二三日までの間に大阪社会医療センター外来を訪れた要入院結核患者百名を調査した。詳しくは、二五ページ～四〇ページを参照してほしい。単に結核だけとして見るのではなく社会的な面、経済的な面また心情的な面を配慮しなければならぬ。特に釜ヶ崎の日雇労働という形態、また単身労働者であるということを考えてほしいと指摘した。参加者の声で「釜ヶ崎では処方箋を作りなおさなければならぬ」とあった。また「入院生活が続くように病院訪問も大切である。患者さんのよき相談相手、聴き手になることの重要性がわかった」などとあり、結核患者に対する理解が少し深まったようだった。

3 実践活動

越冬セミナーのいま一つの性格は、ただ「お話を聞く」だけでなく、自分たちの身体―手・足で釜ヶ崎の現実を知ることにある。今年度は、三つの計画があった。一つは、夜間医療パトロール、二つは医療支援活動(病院訪問、診察依頼券の発行、医療相談)、三つは、喜望の家に全国各地からよせられた越冬支援の衣類整理。

4 参加者の感想

参加者の感想は、各人に八〇〇―一〇〇〇字程度にまとめてもら

夜間医療パトロールは、越冬支援活動の大きな柱の一本である。夜一〇時から約一時間～二時間半かけて、地域全体をまわり、青カソン(野宿)のいろいろな相談にのったり、あるいは、緊急の医療活動(救急車を呼ぶ)などをする。このパトロールでは参加者が、昼間の釜ヶ崎ではみえないものに出会う。しかし、パトロールの目的は、あくまで青カソをなくするところに重点がある。

医療活動は、二日目の午前、午後と続けた。病院訪問班と医療相談班に分かれる。病院訪問班は、特に越冬がはじまってから入院した人たちをたずね、当面必要な生活品(タオル、下着類、石鹸など)をわたし、入院生活をはじめて困っていることなどを聞く。越冬で入院する人は、ほとんど生活保護をうけるので、入院時、無一文の人が多く、身体ひとつで入院している。

医療相談班は、越冬闘争実行委員会と共に診察依頼券を発行する。各担当者が、一人一人につき、病状、本籍、氏名などを聞き、カードに記入し、社会医療センターの特別診察に案内し、診察をまわって、施設へ送ったり病院へ入院させたりする。

衣類整理は、二日目午前になされた。全国各地から送られてきたダンボールに詰められた衣類を出し、下着、ズボン、ジャンパー、靴下、オーバーなどに分けて、いつでもすぐ使えるようにする。これは、なかなか手間のかかることであると同時に、どんな衣類が釜ヶ崎に必要なかを知る機会でもある。一般家庭での不用品は、釜ヶ崎でも不用品が多い。